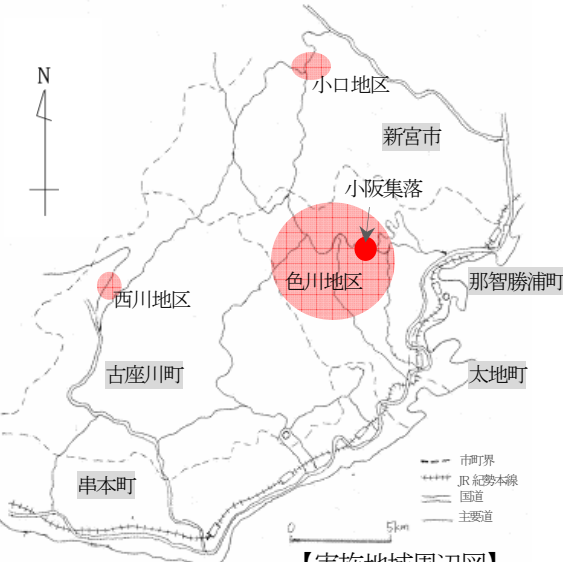


平成21年度 「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業

モデル事業名	「わがらで地域づくり」プログラム
対象地域	和歌山県東牟婁郡那智勝浦町色川地区
対象地域の概要	 【耕作放棄された棚田(色川地区小阪集落)】  【実施地域周辺図】  【県内における色川地区の位置】
提案内容の概要	学生・集落支援員等の若者の力を活用した<u>住民主体の地域づくり拠点設置</u>にむけた活動。外部の若者を巻き込み住民の自治意識を高める手段として、学生の集落調査を実施。集落支援員を核に住民と学生との連携を図り、<u>拠点設置のための組織づくり</u>に着手。より普遍的持続的なしくみ作りにもけた近隣他地区との<u>地区間連携</u>を検討。
提案する活動の内容 (1) 地域の課題	現在、那智勝浦町と新宮市とがH22年3月の合併を目指して合併協議会を設置している。財政力指数は那智勝浦町が0.40、新宮市が0.42(H19年度)と、いずれも財政状況は厳しい。那智勝浦町財政健全化プログラムには、役場出張所の事務を郵便局等へ委託する策が盛り込まれており、色川出張所も近い将来廃止されるおそれがある。H20年に那智勝浦町が実施した「新宮市との合併協議に関する町民アンケート」によれば、合併が進んだ場合の不安要素として「まちの区域が広くなり、行き届いた行政サービスが受けられなくなるおそれがある」が第1位に挙げられている。 特に過疎の進んだ地域は行政サービスによる保護に依存してしまいがちであるが、自治体そのものに余裕がない以上、行政に頼るのみならず、住民自身が主体的に地域のことを考え行動していくことが求められる。そのしくみ作りは今いる住民の力のみでは難しく、外部協力者の力を借りる必要がある。 H20年度、「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業として、色川地区内小阪集落において学生による集落調査「むらの教科書づくり」事業を実施した。これは、都会しか知らずに育った大学生が、集落の昔ながらの暮らしについて聞き取り調査を行い、日本の原点である「むら」に目を向けるきっかけを作る事業であった。聞き取り調査を契機に、学生が集落に足を運び、お年寄りとの交流を図るという当初の目的は達成できた。さらに学生からの刺激を受け、小阪青年団の再結成にみられるような集落内の活気高揚という効果も得られた。一方で、以下のような課題が浮かび上がった。 ・一過性の事業で終わらず、長く継続させること ・なるべく長期で滞在し、お年寄りの話をより深く理解するための生活体験を取り入れること

	・聞き取り調査をより充実させるため、調査手法の事前講習や調査テーマの設定を行うこと ・昔話を掘り起こし交流を図るだけでなく、現実として集落をこれからどうしていくかを考えること これらの課題を克服するためには、集落調査をより充実したものへと発展させつつ、学生が集落の外部協力者として地域づくりに参加していく流れを作る必要がある。 同じく H20 年度には、那智勝浦町が集落支援員を導入した。H21 年 1 月から 2 名が色川地区住民への聞き取り調査にあたっている。集落支援員には定住意思のある若者が登用され、地域づくりのコーディネーターとしての役割が期待されているが、具体的な活動内容ははまだ模索段階にある。その存在を明確に位置づけるためにも、既存の住民組織や「むらの教科書づくり」を契機として地区に出入りし始めている学生といった地区内外の多様な主体との連携を強め、外部協力者の力を借りた住民主体の地域づくり体制を整備し、目に見える組織／拠点を作る必要がある。 ところで、移住者の多い色川地区は今まで多様な地域活性化事業に取り組み、地域づくりの先進地として県内外から注目を集めている（問い合わせ 70 件、視察対応 19 件、取材対応 10 件、：H20 年度実績）。しかし、近隣他地区との連携は進んでいない。本来、近隣他地区がともに持続し交流ができてこそ色川地区も持続可能なものであり、色川地区単独で生き残っていけるわけではない。今後当地区は、事業実施の成果や反省を近隣他地区と共有し、他地区でもそれぞれの地域づくりが行われていく流れを先導する役割を果たすべきであろう。それは色川地区自身のいっそう持続的な地域づくりに資すると同時に、移住者がおらずより厳しい状況にあるいかなる過疎地域でも可能な、普遍的な地域づくりモデルの構築にもつながると考えられる。
(2) 活動内容の案	活動①：学生による集落調査 内容： 学生が色川地区に滞在、聞き取り調査を実施（主に夏期休暇に長期滞在することを想定） H20 年度「むらの教科書づくり」の反省から、調査方法について事前講習を行い、調査テーマの重点項目を設定（「政治」「経済」「日常生活」を予定）。お年寄りの話をより深く理解するための生活体験を導入（農作業、藁細工等）。調査結果をとりまとめ、地域づくりの参考資料となる冊子を作成。 活動②：「集落支援センター」設置にむけた地区内連携の強化 内容： 集落支援員を核に学生と住民との連携を強め、「集落支援センター」設置の検討組織を立ち上げ。 集落支援員による学生の補助（生活・調査・成果とりまとめの補助、生活体験の企画・実施等）および学生と地区住民との連携を図る企画の立案・実施。「色川を語りつぐ会」、小阪青年団、その他の地区住民との合同勉強会を企画・実施。組織立ち上げに向けた会合の開催。 活動③：地区間連携のありかたの検討 内容： 応募学生の一部を、近隣他地区で受け入れ（5 集落に 2 名ずつ、計 10 名を予定）。 H21 年度中は、学生がそれぞれ担当した集落で継続的に調査実施。各集落の受け入れ担当者による会合や相互視察による密な情報交換。集落支援員や「集落支援センター」導入についても地区ごとに検討。H21 年度の成果評価と近隣他地区へのさらなる活動波及のため、合同報告会の開催。
応募団体名	色川百姓養成塾
リンク	http://www.iju-join.jp/prefectures/wakayama/blog/500098/
部局／担当者名	事務局 春原麻子
連絡先	0735-56-0130
推薦市町村名	和歌山県東牟婁郡那智勝浦町